
Episodio?

竜零姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Episodio?

【Nコード】

N3380V

【作者名】

竜零姫

【あらすじ】

銃を持つて共に戦う用意はできているか？

遠くて近い未来。それは世界の終り。

かつて世界に名をはせた巨大なテクノロジー企業、アイラント社。
彼らが追及していたのは技術の進歩ではなく理想郷だった。
アルカードディア

狂いゆく世界に翻弄され、それでも生きる人間たち。

これが彼らの望んでいた理想郷なのか。それとも……。

Episodio 1

<スノー>

身長165cm

年齢25歳

本編の副主人公。危険を顧みない自由気ままな性格。童顔で背が低く、実年齢より若く見られる。

変な方向に頭が冴え、とても器用な口先の魔術師である。（人を言葉巧みに騙すのが上手）

アンドロイドたちと激しい死闘を繰り広げることになる。

はせみやれん
<長谷宮蓮>

身長190cm

年齢20歳

本編の主人公。

大人びた風貌で全体的にクール。

チャラついている外見とは裏腹に実はとても繊細で神経質な性格で、心やさしい青年である。

お人好しな面もあってか、スノーにはことごとく騙されてしまうことも。

なかつしゅう
<中田愁>

身長180cm

年齢20歳

パーシングググライド刑務所の看守。夸音に密かな恋心を寄せている。

まなべ かのん
<愛唄夸音>

身長170cm

年齢20歳

医者であり、科学者でもある。気が強く、男勝りな性格だが、普段はお淑やかな女性を演じている。

<トニー>

身長180cm

年齢60歳

スノーが唯一信用している存在であり、旧友である。
酒が大好きで、1日の大半は酒場にいる。

<アンドロイド>

IQ180と高機能なロボットである。

外見は人間そのものであり、男女性別判断可能である。
頭を撃ち抜かなければ死なないためある意味無敵である。

<桐生氏^{きりゆうし}>

身長???cm

年齢???歳

アイラント社の社長。

<朱^{あまこ}?>

身長???cm

年齢???歳

桐生氏に忠誠を尽くす、アンドロイド。
蓮たちを、陰から観察する。

#00 始まりの物語とその幕開け（前書き）

かつて世界が人間によって支配されていた頃。

アイラント社は世界最大の企業に成長した。

90%の家庭に同社の製品があり、強大な財力を誇る。

表向きは世界有数のコンピュータ・テクノロジー、アンドロイド関連の会社。

しかし同社が社員に極秘で行っていたのは

アルカーディア
理想郷への追及だった。

#00 始まりの物語とその幕開け

桐生氏が最初に理想郷の^{アルカードィア}ことを口にしてから二ヶ月が経過した頃、彼は寝室に朱？を呼び、思いもかけぬ仕事を命じた。

その仕事とは、高貴フラメルの子を探してほしいというものだった。

朱？は咄嗟には意味が飲みこめず、冗談をいつているのかと思った。

「申し訳ないが、冗談ではなく本気なのだ」

そういつて桐生氏は、ばつが悪そうに下唇を噛んだ。

彼がそういつた表情を見せるのは珍しいことで、逆に朱？が戸惑った。

「高貴フラメルは……」

朱？がいい終わる前に桐生氏は首を振り始めていた。

「無論、お前には理解しがたいだろう。だがフラメルが賢者の石を創ったのは事実だ。彼は賢者の石によって、不死を得た」

桐生氏の話によると、高貴フラメルとは伝説の錬金術師ニコラ・フラメルのことを示すらしい。

高貴フラメルの子——ニコラ・フラメルの子を継ぐ者。朱？は桐生氏を真つすぐに見た。

「つまり不死の血を継ぐ子を探せということなのですね」

「そういうことだ。白状すると、今までにも何度か探そうと思ったことがある。この世に不死の血を受け継いでいる者がいると考えただけで、じっとしていられなくなったのだ。私も不死を手に入れたと思った。誰もが憧れる永遠の命を」

「……もし高貴フラメルの子が見つかったなら、どうなさるおつもりですか」

朱？が尋ねると、桐生氏はあっさりと答えた。

「何もしない」

「えっ？」

「何もしないといったのだよ。ただ上に報告するだけだ。不死の血と聞いたら、あの御方もお喜びになられるだろう。そのためにも、不死の血に傷を付けるようなことはしたくない」

桐生氏らしい考えだなと朱？は思った。

「自分の寿命を悟ったから、この話をお前にしているんだ。よろしく頼むよ。何度もいうようだが、タイムリミットはさほど長くないのだ」

「やってみます。でもひとつだけお願いがあります」

「何かね」

「そのタイムリミットを、できるだけ伸ばしてください。うんと長く」

桐生氏は瞬きを何度か繰り返してから、「努力しよう」といった。桐生氏は自分が不治の病であり、もはや助かる見込みのないことを知っていた。

死を前にして彼の最大の懇念事項は、自分が築いてきたものが今後どうなるか、ということだった。

彼はそれを自分が最も信頼できる“ニンゲン”に託そうとしたにすぎないのだ。

#01 高貴フラメルの血脈

東洋の島国の北端に位置する、北方領土・択捉島の住人の長谷宮蓮は、「僕は純粋な日本人です」というのが自慢だった。

この島で生まれ、この島で死ぬ。それが蓮のモットーだった。

たとえロシア人に悪口をいわれようが、ロシア人の子どもに小突かれようが、純粋な日本人だからこそ誇りを持って彼らに接することが大切だ、と蓮は考えた。

しかしロシア人皆が、日本を嫌っているとはいえない。

親日の人だつて少なからずいるのだ。そしてその人たちは皆、「日本」を国としてではなく、人として見てくれている。

それは蓮にとって喜ばしいことだった。

現に蓮が住み込みで働かせてもらっている自動車工場の親方はロシア人だが、とても気さくな男だ。

さて、ある日の火曜日のことだ。

太陽の異常な傾きの変化により、北の地はよりいっそう寒さを増していた。おかげでベルトコンベアーは凍りつき、全く動かないことが頻繁にある。

「困ったなあ……」

親方は頭を抱えた。それもそのはず。凍ったベルトコンベアーほど厄介なやつはいない。

霜や氷が張っているせいで、ベルトコンベアーは真っ白な一枚の板となっていた。

「蓮、あそこの裏からホースを取ってこい」

親方がいくつかのキーを続けざまに押し、蓮は直径15センチの

ホースを引っ張り出し、凍ったベルトコンベアーに向けた。

「蓮、ホースの口を開ける」

蓮はホースの口をゆっくりと開けた。

ホースの口から出る火炎が、霜や氷が張った部分を徐々に解かしていく。

数分も経たない中に、ベルトコンベアーは元通りになった。

「よし、いいぞ蓮」

蓮はホースの口をしっかりと閉め、ホースを元あった場所に丁寧にしまった。

親方がレバーをひくと、ベルトコンベアーのギアは快調に動き出した。

「こういうのは、お前のほうが得意だろ。今度からは任せるよ」

「はい」

蓮は快く返事をした。親方はそんな蓮の姿勢に満足したのか、2回ほど深く頷いた。

蓮はエンジニアだ。将来はバイオ・エンジニアだ。蓮がバイオ・エンジニアに惹かれる理由は二つあった。

一つ、森林の全滅。二つ、それによる酸素の減滅。

人類がありとあらゆるものを貪った結果、地球は死の星となりつつある。

昔は火星への移住計画なんていわれていたものだが、結局のところそれは空想の話だった。

人類の夢なんて所詮そんなものなんだと改めて感じさせられる。

蓮は深く息を吸った。吐いた息は白かった。

こうやって空気を吸っていられるのも今だけだろう。

地球上の酸素は確実に減っている。それまでのんびりと過ごすのもいい、人類を救うために旅に出た方がいい。だが、今はこの島で一生を過ごしたい。

世界の終りがすぐそこまで迫っているというのに、僕はなんて怠惰なんだろうか……。

#02 パーシンググライド刑務所

愛唄夸音。彼女は択捉島一の病院の院長だ。そして択捉島一の科学者でもある。

砂漠の秘境にあるといわれる「不死の花」を見つけに行ったり、森の主ともいわれる「人熊」を探しにいたり、とにかく危険を顧みない女性だ。

子供の頃、父親に「お前は立派な科学者になる」といわれて以来、夸音の将来の夢は、偉大な科学者になることだった。

その夢をなんとしてでも叶えたいと、何度も試みたが、これといった成果は出なかった。

「不死の花」や「人熊」なんて、所詮妄想。現実離れ。

私はもつと現実的に世の中を見なければならぬ。

今の現実。それは目を覆い隠したくなるほどの辛い現実だ。

世界に名立たる科学者たちも、この謎を解明しようと努力したが、誰一人完璧な答えを見出せた者はいなかった。

知識。そんなものは生物のほんの一部に過ぎない。

たまには第六感を働かせて、推理に臨むのもいいだろう。

さて、そろそろ検診の時間だ。夸音は机に散らばっているカルテを整理した。

「先生、緊急のお電話が」

看護師が、受話器を片手に診察室に入ってきた。

「どこから？」

看護師は少しためらいながら、「パーシンググライド刑務所です」といった。夸音は背筋が寒くなるのを感じた。

「もしもし……はい、わかりました。……ええ、すぐ行きます」

突然の刑務所からの電話に夸音は顔色を失っていた。
パーシングググランド刑務所。あそこは凶悪犯と悪徳看守がのさばる、金と暴力の巣窟だ。

看護師は不安な表情を浮かべ、さっきから落ち着かない様子だ。

「……重病人がでたそうよ。行ってくるわ」

「え？一人で？」

「ええ。その代わり、あなたは今日の検診をお願いね」

「……わかりました。お氣をつけて」

看護師は申し訳なさそうに一礼して去った。

夸音は急いで車に乗り込んだ。車には必要最低限の医療機器が積んである。

車のキーを差し込み、勢いよく回した。ところが、いくらエンジンをかけても車が動かない。不吉な予感が心をよぎった。

「気温が低すぎてバッテリーが壊れたんだわ。早く行かなきゃいけないのに……」

今はバッテリー交換をしている時間はない。一刻も早く患者のもとに行かなければ……。

すると幸運なことに、一台の車が夸音の前に止まった。
運転席の窓から顔を出した男は、夸音の知り合いだった。

「やあ、夸音。今日も忙しそうだね」

中田愁。夸音の幼馴染である。少しカールのかかったショートヘアが、彼の整った顔立ちを際立たせている。

「愁、いいところに来たわ。私を車に乗せて」

「一体どうしたの？」

「急用なの。でも車のバッテリーが壊れちゃって。パーシンググランド刑務所に」

「え！？」

愁は驚いたようだった。それもそうだろう。あの刑務所に行くなんて、自殺行為としか思えない。それに……。

「別にいいけど……。そういえば夸音は、俺の職場を見学するのは初めてだったよね」

「そうだけど、見学しに行くんじゃないわ。患者を診に行くのよ」

「はいはい。医者は大変だね」

愁はやれやれといった表情で笑った。夸音は自分の車にある医療機器を、愁の車のトランクや後部座席に積めるだけ積みこんだ。

車は雪道を発進した。刑務所に近づくにつれて、吹雪が激しくなっているのが分かる。

頑丈な鉄の門が見えたとき、愁はブレーキを踏んだ。

「これ……刑務所じゃなくて、ただの収容所みたいね」

「ははっ、まあね。凶悪犯罪者ばかりいる刑務所だから。管理はちやんとしないとかな」と

パーシンググランド刑務所。想像していた以上に酷い。囚人はこんなところにいて凍死しないのだろうか。きっと毛布一枚で、凍えながら毎日を過ごしているにちがいない。

車を降りると同時に、背の低いうつすらハゲの太った豚のような男が刑務所から出てきた。

「愛唄院長ですか？」

「ええ、そうです。それで……患者はどこに？」

「囚人なら牢屋にいますよ。おや、副看守長のお前がなぜ」

「彼女の車が壊れていたので、通りすがった私が」

「うむ。」くろっ

愁は夸音にそつと耳打ちをした。

「……この矯正監だよ」

「え？あんな豚男が？」

「しっ、そんなこといつちやダメだよ」

矯正監に案内され、夸音たちは薄暗い独房の前にきた。

そこには見張りの看守が二人いた。

矯正監は、愁を顎で使った。愁は前へ出て、独房の扉を開けた。

「気をつけてください。奴は人殺しではありませんが、立派な薬中
です」

「わかりました」

夸音は恐る恐る独房の中に入っていった。

そこは独特な消毒液の匂いがたちこめていた。夸音は思わず鼻を
覆った。

「あの……具合はどうですか？」

独房の奥には横たわっている一人の男がいた。

いいものを食べさせてもらっているのか、男は囚人にしては太り
過ぎていた。夸音にいわせれば「豚男」だ。

「あの、大丈夫ですか？どこが悪いんですか？」

男はなんの反応も示さない。夸音は恐る恐る顔を覗きこんだ。

「え？」

夸音は思わず声を漏らしてしまった。

この男……さっきの――

「くそ！！おい、待て！！」

愁の怒鳴り声が、独房の外から聞こえてきた。

夸音は状況が飲みこめず、慌てて独房の外に出た。

「夸音、危ない!!」

「——っ!？」

愁が叫んだとき、すでに遅かった。

相手は、締めつけるように夸音の首に腕をまわし、同時に夸音の頭に銃を突きつけた。

「段取りよくありがとう、お姉さん」

「あなたは……」

夸音は驚きの顔を隠せなかった。
矯正監^{トット}の化け顔が剥がされたとき、そこに現れたのは、細身の嫌み^{ミット}つたらしい童顔の男だった。

#03 脱獄の日

一方通行の廊下のため、互いに睨みあいの状態が続いた。愁は無線機で応援をよこそうとしたが、スノーがそれに気づいたため、あっけなく断念した。

一瞬空白の時間があり、その後でスノーは相好を崩した。

「あともう少しだったのにな」

「あなたがここの囚人ね」

「矯正監^{トッブ}の変装は少々手こずった」

「そのようね。誰だって他人になるのは大変よ。いつとくけど、あなたはここから出られないわ。観念するなら今のうちよ」

「なぜ？」

「刑務所を出ても、ここは小さな島。湾の外にも出られないわ」

「それはどうかな」

「え？」

スノーの腕が、夸音の首から離れたその瞬間――。

激しい爆音と共に夸音の身体は宙に浮いた。

気がつくと、周りが煙に包まれていた。夸音自身の身体も、床に叩きつけられていた。

近くで呻き声がした。見ると、看守たちが落ちてきたコンクリー

トのがれきの下敷きになっているのだった。

「なんだ、一体何があったんだ」

愁ががれきの陰から現れて怒鳴った。しかし脚を怪我したらしく、立ち上がる前に床に崩れた。

夸音はふらふらと起き上がった。額から血が流れているのが自分でも分かる。

「みんな、起きて。起きるのよ」

彼女の声で、倒れていた人々も身体を起こし始めた。

「しっかりするのよ」

「外に出るんだ。早く」

愁が片足をひきずりながら指示している。看守たちは、放心した顔で脱出を始めた。

突然ものすごい音がして壁が倒れた。その向こうから炎が塊となつて飛びこんできた。

夸音は反対側を見た。炎はすでに廊下にまで及んでいる。やがて独房がひとつずつ焼かれていくことだろう。

「夸音！！」

出口から愁の叫ぶ声が聞こえた。夸音は急いで出口に向かって走りだした。

「囚人を捕えろ。明日の午後、奴を極秘死刑にする」

愁は眉間にしわを寄せていた。夸音はすかさず反論を唱えた。

「人の命を軽々と葬るの？」

「奴は刑務所の半分を爆破した。当然だ」

夸音の前から数台のパトカーが刑務所から去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3380v/>

Episodio?

2011年11月13日08時46分発行